

## 風の腕

黄金の稻田を一陣の風が吹き渡り、波を打つ  
た様にサラサラと稻穂がゆれる。穂波と呼ばれる  
もので、見える空気の流れが風の息として  
見える一瞬である。青空にハケで掃いたような  
絹雲の白い筋に上空の季節の移ろいが見られ、  
野分けの風に激しい秋の勢いを感じ、木枯らし  
に舞狂う落ち葉に彩られた秋の風が見え隠れす  
る。

秋の深まりとともに風がより身近に見える季  
節となつてくる。

### 風の腕

#### 紙切れの下から

##### あ、持ち上げたよ』

日本航空のウインスのエッセイ、風紀行に書  
かれた早坂暁氏の『風とHAIKU』の中の一  
節である。カナダの小学六年生の造った三行の  
詩、HAIKU（俳句）の訳である。そつと持  
ち上げられた紙に見える風の腕を見てとる素  
朴な感覚が素晴らしい。

日々、見えない空気を相手に温度や風を観測  
して天気図に具象化し、空を見上げては天気予  
報をして生活の業とする予報官諸氏もこの新鮮  
な感覚には脱帽するであろう。次々と襲来する  
あの巨大な台風ですら上空の風まかせて動く。  
もし宇宙から雲の渦を見ていたならば、不思議

にも見える風の腕でグイと向きを変えられ  
いるように見えるだろう。

か細い腕でかすかに搔すられている木の枝も  
あれば、丸太棒のような筋肉隆々の腕で野分け  
の風を見せてくれるものある。天気予報を預か  
る予報官諸氏も見える風の腕を相手に悩まさ  
れながらも、風を通して組立てられた予想に腕  
の冴えを見せてくれるのではなかろうか。明日  
は十五夜、満月を横切る雲に、どんな秋風の腕  
が見えるだろうか。